

— 5. 第26回気象講座「新しい気象」 —

気象講座雑感

日本気象協会北海道支社 中田 琢志

第26回気象講座「新しい気象」は、去る7月28、29日に開催され、初日は21人、2日目は20人の受講者に参加いただきました。

今年度も、熱心な受講者と天候に恵まれ、盛況のうちに無事終了しました。

1日目は、札幌市青少年科学館で「ジェット＝ストリームの謎を気候モデルで解く」（講師：北海道大学大学院理学研究院 稲津 将氏）、「光を使って見る結晶の成長素過程」（講師：北海道大学低温科学研究所 佐崎 元氏）の講義と館内見学を行いました。

稲津講師は、ジェット＝ストリームに関して、その速度と同じ乗り物をクイズ形式にするなど、親しみやすい講演でした。気候モデルに関しては、ニュートン力学やメンデルの法則との違い、風速や気温の予測方法の概略について教えていただきました。また、近年の数値計算技術の発展と今後の問題点（雲の評価）も、分かりやすく説明していただきました。

佐崎講師は、結晶の成長メカニズムについて、たんぱく質の分子の動きを題材として最新の知見を紹介していただきました。従来よくわかっていなかった液体から固体への結晶成長過程について、非接触・非破壊である光学顕微鏡で撮影した貴重な映像を用いて説明して下さいました。今後は、氷結晶の研究にも応用したいとのことでした。

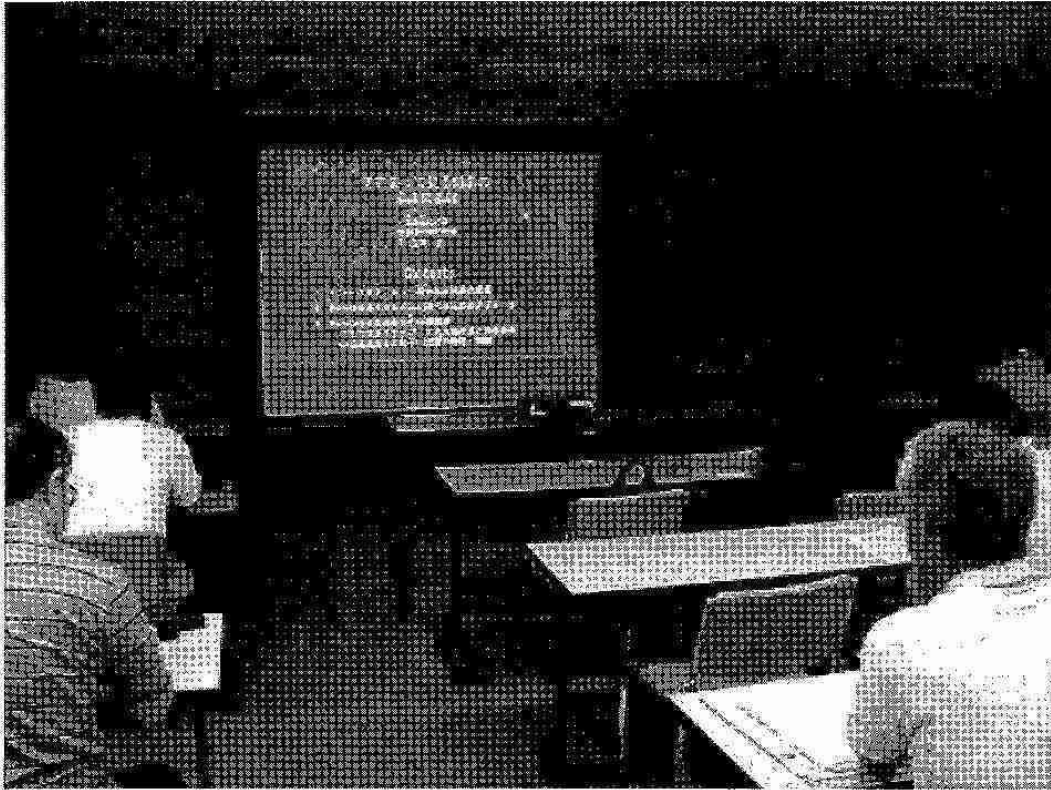
2日目は、札幌管区気象台で「天気は変えられるか!?～人工降雨・降雪で水不足克服!?～」(講師：日本気象協会北海道支社 久保田 敬二氏)、「南極のフィールドで感じたこと—地球環境を考える—」(講師：札幌管区気象台 岸 隆幸氏)の講義を行いました。

久保田講師は、人工降雨について、北京オリンピックでの人工消雨作戦というホットな話題を導入に、原理にまで遡って丁寧に説明していただきました。液体炭酸法を用いて、対象となる雲の条件を整えば、環境への負荷が小さく比較的安い費用で雨を降らせることができるということでした。今後は実用化に向けての体制作りが重要とのことでした。

岸講師は、過去2回の南極越冬経験で感じたことと、温暖化に関する地球環境問題について話していただきました。南極の氷山の氷を実物でお見せいただき、数千年～数万年前の気泡のはじける音を聞くことができました。日常生活では想像もつかない苦勞の一方で、かけがえのない「楽しい」体験の一端を垣間見させていただきました。

今後も多くの方々にご参加いただき、最新の気象情報を生活に役立ていただければと考えています。参加者アンケートの抜粋を以下に記します。

- ・ジェット気流の発見者が、日本人とは痛快である。
- ・結晶ができる過程がよく分かって、おもしろかったです。
- ・人工降雨はなかなか興味のある内容でした。(特に、北京オリンピックに合わせた内容)
- ・南極観測の貴重な体験談に感銘を受けました。初めて見る南極氷に感動。



受講風景（札幌市青少年科学館）



受講風景（札幌管区气象台）